

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 556 号 平成 25 年 6 月 7 日

二刀流

6月1日に行われたプロ野球、日本ハム対中日の試合で、二刀流を標榜する大谷翔平投手が2試合目の登板でプロ初勝利を挙げました。

5回まで87球を投げ、4安打3点を奪われますが味方打線の援護もあり勝利投手となりました。また、この日のボールのスピードは最速156キロでした。

快刀乱麻という訳にはいかなかったようですが、高校生のルーキーとしては、なかなかの出来だったのではないのでしょうか。しかも、軽々と150キロ台のスピードボールを投げ込む大谷投手は、早くも大物投手としての片鱗を見せています。

一方、打者としての大谷選手は、これまで18試合に出場し46打数16安打、3打点、打率3割4分8厘という好成績を残しています。大谷選手は今のところ規定打席数には達していませんが、上記の表からも、彼が打者として非凡な才能の持ち主である事が伺われます。

この様に、今後の活躍がますます期待される大谷選手ですが、今一番の関心事は、彼はこのまま二刀流を目指すのかという事でしょう。高校野球では、投手で4番という選手はおりますが、プロ野球の世界で投手と野手の両刀遣いは果たして可能なのでしょうか。

6月2日に放送されたTV番組の中で、張本勲氏は、「150キロの速球を投げる投手はなかなかいないので、是非投手に専念してもらいたい」と述べています。

また、かつて「ハマの大魔神」として活躍された佐々木主浩氏も、「今は高校時代の財産で投げているとあっていい。投手としての練習を本格的にしておかないと、将来が厳しくなる」と述べ、張本氏と同様、まず投手に専念すべきだとしています。

もともと二刀流は、大谷選手自身の希望であり、日本ハム側も支援していくという姿勢を見せています。もしも、規定投球回数、規定打席数をクリアして一定の成績を残すことが出来たら、プロ野球の歴史に新しい1頁を開く事になるでしょう。

大谷選手は、非常に難しい事を承知の上で二刀流にチャレンジしようとしており、日ハムファンの1人としては応援したい気持ちは十分あります。しかし同時に、シーズンを通して二刀流が通用するものなのか、結局は大谷選手の選手生命を縮める事にならないか心配もしています。

「本人が望んでいるのだから、悔いの残らないようにやらせたら良い」という考

えもあると思いますが、それが本当に本人の為になるのか慎重に検討し、対応すべきです。

大谷選手の二刀流の話を聞かたびに、私は、どうしても包丁の事を考えてしまいます。

包丁には、用途を特定せず様々な食材に使える万能包丁というものがあります。「文化包丁」や「三徳包丁」というのがそれで、これ1本あれば、肉でも、魚でも、野菜でもOKです。しかし、魚のおろし、骨など硬いものを処理する場合には「出刃包丁」、刺身を作る場合には「柳刃包丁」、野菜を切る場合には「菜切包丁」や「薄刃包丁」、肉を切る場合には「牛刀」という様に、それぞれの食材に応じた専用の包丁を使えば、切れ味も良く、綺麗な仕事ができます。究めるというのはそういう事で、お料理1年生なら「文化包丁」で用が足りませんが、段々腕が上がって来ると専用の包丁が欲しくなる、というのは良く分かります。

俗に「器用貧乏」という言葉がありますが、私はこれ迄、仕事は器用にこなすし、有能なのに、結局は大成出来ずに終わってしまった、という人を何人も見て来ました。

大谷選手の夢は、日ハムファンの1人として応援したいと思っています。しかし同時に、「二兎を追う者は一兎をも得ず」という事になってしまっは元も子も有りませんし、少なくとも大谷選手には、「文化包丁」で終わって欲しくはありません。

(塾頭：吉田 洋一)